

ここだけのハナシ

～アニマル・コミュニケーション～

岩田 よしまろ



まえがき

動物と話したい、または話せないと思っているあなたへ。

動物と話したい！ 話してみたい!! って、一度は思ったことないですか？

この本を手取る人なら、人生のうちで一度は思ったことがあるのではないのでしょうか。

私はあります……しかも何度も。

子どもの時はドリトル先生を観て、自分もドリトル先生のように動物たちと話したいと思い憧れ、分別のつく小学校の中学年ぐらいになると、動物たちと話すことなんて不可能だと思い至りました。

だって、現実の動物たちは人間のように『言葉』を喋らないのですから。

そんな私の『常識的』な考えを覆す出来事があったのは、結構いい大人になった30代半ばのことです。

子どもの頃からずっとやりたかった乗馬を始めたのですが、その時に出会った1頭の馬がきっかけで『馬と話せたら……』と本気で思うようになりました。

その馬は、乗馬を始めて間がなく、馬と接することも恐々で、騎乗も下手くそな私を、真っ直ぐな目で何かを伝えるかのようによもジッと見つめてきたのです。



その目を見返しながら、彼が何を言いたいのかわからない自分に苛立ちすら感じました。それぐらい、その馬は思いのこもった目で見つめてきたのです。

だけど、『馬と話す』なんてことは誰にとっても馬鹿げた話で、当時のインストラクターにも「馬と話したい」と言うと、当然のごとく「はぁ？ 何を言ってるんですか」と馬鹿にしたように言われたぐらいです。

そんなある日、馬とは喋れないながらもコミュニケーションが取れるようになってきた頃、某乗馬雑誌の記事に『アニマル・コミュニケーター』という仕事をしている人の特集が半ページ分載っていました。

イギリスの方だったと思いますが、動物の気持ちを保護者に通訳し、人と動物の架け橋になるアニマル・コミュニケーションという仕事をしている人のインタビューだったと思います。

小さな記事でしたがその記事を読んだ時の、突然暗闇の中で光に貫かれたような……視界が広がったような衝撃は今でも忘れられません。

だって、そうでしょう？

特別な能力でもない限り、普通の人間が動物と話すなんて不可能なことですから。いえ、当時の私は大勢の人たちと同じように不可能なことだと思い込んでいましたから。

興奮冷めやらぬまま、WEBで『アニマル・コミュニケーター』を

検索したところ、10数年前はまだまだアニマル・コミュニケーションの認知度も今よりかなり低く、わずかな情報しか得られませんでした。

それでも私に光を与えてくれたのはリディア・ヒビー著の『アニマル・コミュニケーター』（ヴォイス）という本でした。

その本を読むと、アニマル・コミュニケーターには誰でも練習すればなることができると、訓練すれば誰でも動物と話すと書かれていました。『誰でも動物と話することができる』なら、私も動物と話することができる！ ということですからね。

しかし『私もアニマル・コミュニケーターになりたい！』と意気込んでみても、現実はどうしたらいいかわからなくて、実際にワークショップに参加し始めたのはそれから2年ほど経っていたかもしれません。

いろんな先生のワークショップに参加したり、書籍を読み漁ったり、様々な努力を重ねてプロになったのが数年前。気が付けばアニマル・コミュニケーションを知ってから10年以上の月日が流れていました。

今では10年前と違って、テレビ番組のお蔭でアニマル・コミュニケーションを知っている人も増えてきました。

それでもまだまだです。

『アニマル・コミュニケーション』を知ってはいても、特別な能力



を持った人しかできないとか、スピリチュアルなものだと勘違いしている人が大勢います。

確かにアニマル・コミュニケーションにはスピリチュアルな一面もありますが、どちらかと言えばとても現実的な動物とのコミュニケーションスキルですし、日常的に使えるコミュニケーションツールでなければ『アニマル・コミュニケーションではない』とも思っています。

日本では共に暮らす動物のことを「ペット（愛玩動物）」と呼びますが、欧米では「パートナー（伴侶動物）」と呼ぶそうです。動物たちは生きた玩具ではなく、家族であり深い絆で結ばれたパートナーなのです。

そして飼い主は「保護者」と言います。伴侶動物を「飼う」のではなく、保護して慈しむのです。

動物たちには種族としての本能や性質がありますが、人間の身近にいる動物（動物種による）は人間と同じように喜怒哀楽の感情があり、思考能力もあります。

動物関係の仕事をしている人ですらまだまだ動物は話せない、人間の言葉がわかるわけないって思っている人が意外と多いですが、動物たちはちゃんと人間の『言葉』を理解しています。

そのことを理解していないのが人間だけなのです。

私はどこにでもいる普通の人間です。

特に際立った能力がもともとあったわけでもないし、子どもの頃

から動物に囲まれて過ごしてきたわけでもありません。

それでも今、『動物と話す』という普通なら考えられないような夢を叶えることができました。

動物と話することができる人生はとても豊かで楽しいです。

少々騎乗が下手くそでも、馬と話することができれば何とかなるし（インストラクターには怒られますけど）、初めて会った犬とでも仲良くなれるし、自分の家の猫たちとは強い絆で結ばれています。

多くの保護者（飼い主）は、アニマル・コミュニケーションをきっかけとしてパートナーとの関係に良い変化をもたらし、人も動物も生活環境が向上しています。

問題行動も、心身の問題もアニマル・コミュニケーションができれば、保護者である自分とパートナーにとって最善の道、対処法を探ることができます。そして、何よりも深い愛情と信頼で結ばれているので、人も動物たちも安心安全に幸福に暮らすことができます。

『動物と話したい』ですか？

それならぜひお話ししてあげてください。動物と話することはもはや特別なことではなくなりましたよ。

叶わぬ夢じゃない、誰にでもできることです！

自分のパートナーを見てください、何か言いたそうにジッと見つめてくる時はありませんか？ その時きっとあなたは思うはずです、「何が言いたいんだろう？」って。



そうです。動物たちがジッと見つめてきている時、それは間違いなくあなたに思いを伝えている時です。

その時に動物たちが何を言いたいのか、どんな気持ちでいるのかを知ることができたら人も動物もどれほど幸せでしょう。

誰だって話せないと思っていた相手と話すことができれば嬉しいですものね。

この本を読んで、1人でも多くの人が「私も話してみようかな」っと思ってくれたら、そのきっかけになればとても嬉しいです。

そして、大好きなママやパパとお話ができ幸せになる動物たちが1頭でも増えれば幸いです。